

# 哲學研究

第百七十五號

第十五卷  
第十册

ナトルプに於ける「主觀性」の問題に就いて

故 錦 田 義 富

## 一 意識の力素

意識と言ふ時には、其れは如何なる Moment(契機、力素)より成ると考へねばならぬか。之れが爲めには主觀を明らかにする事に依つて意識の性質を明らかにする事が出来る。ナトルプは意識は三つの力素から成ると言つてゐる。即ち其れは、(一)内容 (Content) (二)自我 (das Ich) (三)原作用 (Bewusstheit) の三つである。

何んでも意識したと言ふ時には、必ず上の三つの力素が意識に含まれてゐるのである。例へば赤い色を見たと言ふ時には赤い色を意識したのであり、音を聞いたと言ふ時には音を意識したので、斯かる場合に此等の意識の中に上の三つの事が必ず含まれてゐるのである。其の中内容とは意識されたもの、例へば赤とか音とかはそ

れであり、自我とは意識するもの、即ち赤を見るもの、音を聞くものがそれであり、原作用とは聞くものと聞かれたものとの關係或は見るものと見られたものとの關係、即ち物と我との關係を言ふのである。

内容には知情意の三方面にわたつて其の内容がある。知には知覺、表象、思惟と言ふ様なものが其の内容をなしてゐる。感情にも意志にも必ず内容がなければならぬ。意識は必ず内容を伴ふものである。内容の無い意識と言ふものはない。その内容の中には現在しないものでも意識内容となるものはある。例へばアメリカと言ふ意識内容は之を行つた人でも行かぬ人でも持つ事は出来る。其の内容は夫々違ふであらうが然し現實に無いものも意識内に入る事が出来るのである。ナルプの特徴は此處にある。

自我は如何なる意味に於いても固定した所のものと考へてはならない。我々は自我を見る事も聞く事も考へる事も出来ない。自我は之を一切擱む事は出来ない。自我は考へるものであるが考へられたものでは無い。之を自我だと考へた時には其れはもはや自我の正體ではない。意識現象は流れるものであると言ふ事は常識的になつてゐるが自我は正に流れる流れ其のものである。此の自我と内容の特殊

關係が成立する爲めに此處に意識現象が生ずるのである。以上で意識の型だけは出来たからこれから自我、原作用、内容の順序で述べて行かふ。自我と原作用とは如何なる場合にても問題とする事は出来ない。問題となり得るものは唯だ内容のみである。自我の反射は、それは眞の自我ではない。それは鏡に寫された自我の影であつて眞の自我ではない。離言絶語と言ふ事があるが自我は、それが自我と名付けられた時には其は既に考へられたもので自我ではなくなる。見る我を見る事は出来ない。其に付いて何事をも立言する事は出来ない。其れに付いて何事かを語れば其は Objekt となつたのである。Objekt となつた自我即ち Objekt Ego は知る事は出来る。然し純粹我即ち original Ego は言葉に言ひ表はす事は出来ない。問題にする自我は鏡に寫つた自我である。原物の自我は鏡の中に寫る事は出来ない。我々の問題として語る事の出来るのは此の影像に就いて、あつて、原本の自我は之を語る事は出来ない。映るものと映されるものが一つになれば寫ると言ふ事が無いから映る原物が映されると言ふ事は出来ない。自我はあらゆるものに對して *ego sender* に在るのである。自我に對しては無限のものがある。この無限のものは自我に對して客觀となる。一切のものは自我に對してあり、自我は一切のものに對し

てある。丁度圓の中心點が圓周上の總ての點に對してある様なものである。中心點は自我であり圓周上の總ての點は自我に對する無限の客觀で、其は自我に對して立つ所の文字通りの Gegenstand 即ち對象である。自我其のもの即ち純粹自我は意識内容の對象とする事は出来ない。自我は見る目の様なものである。目は自からの目を見る事は出来ない。鏡に映つた目は自分の目の影である。

原作用は意識關係の根本特性をなすと言はれてゐる。我々の意識作用即ち自我と内容との關係は他のもので説明する事は出来ない。其れ自身即ち自我自身働く事は出来るが他のものを以つて説明する事は出来ない。説明すると言ふ事は同じ事を唯だ他のものを以つて言ひ換へる事である。これは直接自明のものであるから其れ以上直接自明なるものを以て説明すると言ふ事は出来ぬ。若し他のものを以つて説明したならば、それは説明したものより自明で、説明は其れより下位に立つものである。

原作用は分離と結合との二方向に働くものであつて、意識の働きは常に此の二方面にある。意識の中で最も簡單なのは  $A$  is  $A$  と言ふ自同律であるが、之に分離と結合とが働いてゐる。主位  $A$  と賓位  $A$  とは同じものでない。 $A$  が  $A$  であると言ふ事

は自同性を表はし、 $Z \cap Y$ を排除する意味が含まれてゐる。例へば此のチョークは此のチョークだと言ふと、其れは他のものを排除してゐる意味が充分含まれてゐる。此處に分離が働いてゐる。又或は結合關係を表はしてゐる。如何なる意識作用にも分離と結合とが不可分離に相即して行はれるものである。即ち分離と結合とが同時に成り立つものである。之は他のものに依つて説明は出来ない。自我と言ふ唯一無二なるものと、其に對する無限の内容、即ち對象との間の特殊關係を現はす意識作用の分離と結合とは、其れ自身獨特無類のものである。其れは例へば圓心と圓周上の各點との關係の様なものである。自然科学に於ける對象相互間の結合の如き普通の結合は、圓周上の點と點との關係の如きものである。即ち其は同質なるものゝ關係である。斯く意識でない一切のものゝ關係は、同質なるものゝ關係である。意識は之に反し性質の異なるものゝ關係、即ち異質的なるものゝ關係である。意識の作用は特殊無類のものである。同質なるものは、其の關係を翻して考へて見る事が出来る。AからBの關係を翻へして、BよりAの關係として考へて見る事が出来る。然し意識作用は之を翻して見る事は出来ない。見る作用は赤を見るが赤は見る作用を見る事は出来ない。赤が自我を意識すると言ふ事は到底出来ない事である。

ある。七色の赤から紫に至る系列は電波の振動としては赤は〇七ミクロン紫は〇四ミクロン位であるとし、他の色は其の間に位置を占め、尙ほ赤紫の外方には赤外線、紫外線があり、之等を同質の一系列として考ふる時、赤より考へる事も出来れば、逆に紫より考へる事も出来る。鏡に映つた影は自我を見る事は出来ない。現在の自我は一瞬前の自我を考へる事は出来るが、一瞬前の自我は自我そのものを考へる事は出来ない。此の特殊なる關係は如何なる他のものにも無い。斯る意識の作きは、赤紫に即しての作きは之を意識する事は出来るが、赤紫等を見ると言ふ其の作用だけを離して見ると言ふ事は出来ない。何かを見るのである。見る作を見聞く作きを聞く事は出来ない。其の點で自我と同じである。意識作用は即ち其れ丈けを切り離して見る事も考へる事も聞く事も出来ない。自我と作用とを一つに考へて來たが、純粹作用或は原作用は之を自我より切り離して對象として考へては到底解らな  
い。

自我並びに作用は如何なる意味にても問題とはならないが、問題根據 (Problem-grund) となる。凡て學問でも又日常の生活に於いても問題とする事の出来るものは内容に限る。自我は問題とする事の出来ない性質のものである。問題とされる

ものは何か捉へ所のあるものでなくてはならぬ。即ち鏡に映つた影は問題とする事が出来るが然し其の原物は何物としても意識される事は出来ない。自我は意識する作用なるが意識される事が出来ない。

何故に自我は問題にされぬか。其は自我は我々の體驗の中で絶対根源性を現はすものであるからである。絶対根源的なものは其處に在るとする事は出来ない。自我が在ると言ふ事も直接に在るものと言ふ事は出来ない。直接な自我を表はす事になれば、其を鏡に寫して見ると言ふ事になる。それで如何なる意味でも之を問題とする事は出来ない。そんな自我なればこそ自我は捉へる事が出来ず又問題とされぬ故、あらゆる問題あらゆる事實の根底となるのである。此處に自我と言ふ問題根拠が成り立つのである。

問題と問題根拠との關係はどうかと言ふに、問題は問題根拠とされず問題根拠は問題とはされない。此處に問題根拠に對して無限の問題が生ずる。之はカント以來の問題であつて、基礎となるものと基礎付けられるものとは別でなければならぬと言ふ事から始まる。客觀性の基礎は經驗には無い。然し之は先驗性によりて基礎付けられてゐる。普遍必然性は普遍以上のものに存する。問題根拠は

之れを説く事は出来ぬ。自我は唯だ黙するより他は無い。斯う言ふ所は禪でも同じである。ナトルプは自我を「言語に絶す」と言ふて説明してゐる。

自我は或る意味に於いて、動に對して靜である。凡ての意識現象は生滅流轉である。意識は出來事である。其は生じ長じ衰へ滅し動くのである。意識は流れである。其が流れである爲めには其の流れを成立させるものが無くしてはならぬ。即ち其の流に動かない一點がなくてはならぬ。其の中心は動かぬ所のもの、其が自我である。自我を圓の中心として凡ての流れは圓心を中心として圓周に動いて回つてゐる様なものである。其の靜なる中心の自我は唯だ動に對する靜でなく、凡ての動が其れより生ずる靜である。動に即した靜である。而るに中心なる點は無であるから之を動くとも考へられる。其は自轉すると考へてもよい。自我は問題とはならぬと言ふが其は空虚と言ふ事ではない。自我は有ゆるもの、原體験 (Urerlebnis) である。之の原體験は圓周の立場から見れば、圓周點に對して假定されたものとも見られる。此の假定は我々の經驗の中で最も直接な、絶對直接性を表はすものである。斯く自我は問題の根據になる故問題にはされぬ。又絶對直接のものなれば摺みやうがない。

我々の問題とされ得るは意識の三方素中内容のみである。自我の寫影は様々の形で問題とせられるが、本源自我は問題とする事が出来ない。問題となり得るのは内容に限る。それで次は、内容とは何か、問題となる。

## 二 意識内容

意識の内容 (Inhalt) とは何か。之にはカント以來の用語がある。即ち「多様の統一」或は「形式内の材料」と言ふ言葉で言ひ表はされる。先に意識の根本作用は分離と結合であると言つたが、分離が多様であり、統一が結合である。又形式内の材料は分離と結合で統一されたものである。即ち多様は分離されたものであるが、AはA也と言ふ時の主位のAと賓位のAとは別々にあるものでは無く、 $\Delta$ の形で統一されたものである。赤を見て赤となすは多様の統一である。何んとなれば赤は赤の位置を占めるものとして知識の内容をなす。然るに赤は青でも紫でもない。他の色と區別して赤を赤の位置に於いて赤と判断する所に多様の統一があるのである。赤は只だ一つにては意識内容とはならぬ。赤は他の色と、又は最小限度に於いて自我との關係に於いて赤である。色の系列オクダに於いて特定の位置を占めると言ふ意味に於いて赤である。自我と結び付いた赤である。エーテルや電波は自我を超越し

てゐると言ふが嚴密には自我を離れたものではない。電波にしても、幾何の命題にしても自我の對象として意識の内容となり意味があるのである。之れ材料が形式の中に入れられたのである。之を形式的に表せば多様の統一である。

現代哲學に於いて意識内容に付いて色々の見解が成り立つ。然しナトルプの考へを現象學派の考へに對して見るとナトルプは非常に鋭いものである事が解る。

純粹自我又は純粹作用は、内容にはならないと言ふが、對象に即した自我、並びに作用、内容化された自我及び作用は純粹自我又は純粹作用では無くして内容である。

次に自我 (Ich) と作用 (Akt) とを對立させて見る。自我は純粹なる自我と、反射せられた (reflex) 自我と二つに分れる。作用に於いても同様に、純粹なるものと反射せられたものに分たれる。自我に於いても作用に於いても、反射せられた自我或は作用は、意識内容になる事が出来る。之を相對的的自我或は具體的的自我とも言ひ得る。相對的的自我或は具體的的自我は内容である。例へば純粹なる見ると言ふ作き、丈けを見る事は出来ないが、赤色に即しての見ると言ふ作きは、意識内容とする事が出来る。此のナトルプの解釋は非常に優れたもので、作用心理學に對するリッブス、フッサールの批評に一致する所がある。現象學派の考へに於いては、意識を作用、内容、對象

の三段に分ける。赤い色を例として言へば、見ると言ふ作きが作用であり、赤そのものが内容であり、赤い物が対象に當る。見られた色、聞かれた音は、見るとか聞くとか言ふ作用があるから出来たのである。此の作用は主観的なもの、心理學的のものである。次に内容は之に對して物理現象、生理現象と見らるべきである。精神現象と言へば見るとか聞くとか言ふ作きの方面を言ふから、内容は物理現象、生理現象と見らるべきで、精神現象であると言つては當らない。此の點がナトルプの考へと一致してゐる點である。

内容は主観的の性質を持つてゐる。然し対象は超越性を持つ。対象の中には知覺以上のものがある。外界に實在してゐると言ふには、主観に對して超越性を持つてゐると言はねばならぬ。色に於いて赤と言ふ時、赤そのものは超越性を持つてゐる。赤そのものを考へる時、対象としての赤い物は見なくとも、赤としての色の系列として存在してゐる。色の系列は電波の配列である。電波の配列は客觀的に實在してゐる。それは意識を超越してゐる。純粹作用のみが主観にして、内容は主観を超越してゐる。然し内容は多少、主観的性質を帶ぶるものである。それは作用内容、対象と區別するナトルプの區別は、相對的の區別であつて、ナトルプに於いては全體

が主観であり、之の分析は主観性への第一歩である。分析は綜合理解に至る段階である。分析が目的であるのではなく手段である。ナトルプは此處にフッサールの *Logische Untersuchungen* に對して一面的な批評で全體としては當らない批評であるが攻撃してゐる。そしてナトルプは思惟の優れた見解に於いて、綜合を重しフッサールの結合よりも差別の方を主として説いてゐる事を非難してゐる。

他の人は他の人として特殊な感じ、考へ方を持つてゐる事が出来るが、其を如何とも知り得ない。自分は感覺作用を感覺し知覺作用を知覺する事は出来ない。見る色、聞く音を切り離して見る事も聞く事も出来ない。フッサールは見る物、聞く物は獨立してゐるとしてゐるが、其の色、其の音を切り離して見、或は聞く事は出来ない。言を換へて言ふならば、吾人は内容と獨立の作用體驗 (*Aktelebnis*) を持つ事は出来ない。作用は内容に即してゐて内容とは不可分離のものである。赤、青と言ふ時は必ず見ると言ふ働きと結合してゐる。意識内容と言ふ時は其は何人かのものでなければならぬ。意識作用は具體我の作用である。現實の作用である。私が見ると言ふ事は、作用と不可分離にあるものでなくてはならぬ。それならば何故作用と言ふ意識が生ずるか。それは現實には不可分離であつても、抽象上、二つに分けて考へた

丈けである。即ち其は挿入作用 (Einfügung) である。作用と内容との關係は挿入の關係である。作用と内容とが結び付いてゐると言ふ事は、意識内容の特殊の結合であつて、其は形式と質料との關係に當る。形式は統一であり作用である。質料は多様であり内容をなすものである。此の二つの離す事の出來ない關係を挿入の關係と言ふ。然し此れは抽象上の事であつて、實際の内容と作用の挿入の仕方が離れてゐるものではない。同じ一つの感覺例へば視覺の上に色々の性質上の相違がある。赤と青とを見る視覺上の相違は作用にあるのでは無い。内容上に區別があるのである。赤を見るも青を見るも作用としては同一である。然し内容としては赤と青とは別である。赤と青と獨立して作用があるのでない、赤青に即しなければ見る事は出來ない。赤青の性質上の相違は内容上の相違であつて作用の側には存してゐない。時間空間の結合も内容に即して考へられる。内容と獨立した形式の様に考へる時間空間も、意識内容に即した時間空間であつて獨立な時間空間はない。意識内容を離れた時間空間は無い。之は特色のある考へ方である。感情意志の方面に於いても同様な事が言はれる。感情意志の根底は傾動 (Tendenz 或は努力 Streben) である。これが感情意志の根本作用であり絶えず動いて行くものである。リッブ

スの作用體驗と言ふものゝ最も大切なるものである。傾動(或は努力)にしても、その純粹作用は經驗する事は出来ない。何物かを得やうとする努力に依つて何物かを得るのである。何物かゝ意識の根本をなすのである。唯だの努力傾動はない。何物かに向つて即ち内容に即してあるのである。此は具體的のものに就いて見る事が出来る。例へば勉強するとしても何かを勉強するのである。其の内容が無ければ唯だ決心丈けである、努力ではない。具體的内容を得て始めて努力になるのである。努力傾動も何かの内容を得なければならぬ特殊なものである。

普通心理學に於いては、Perception(知覺)と Apperception(統覺)とを對立させてゐるが、ナトルプは之を、Presentation(現前、或は現前意識)と Representation(再現、或は再現作用)としてゐる。此の現前は内容に相當し再現は對象に相當してゐる。意識内容は現前に持つてゐるものである。赤なら現に見てゐる赤である。對象は赤なら赤いものとして考へられた赤其もの、現に意識すると否とに拘はらず存在する所のもの、即ち現意識を超越してゐる赤そのもの das Rote である。Redness である。此の二つのものを意識の立場より吟味すると、現に持たれた赤に對し普通自我は受身に働く。赤を見て黒と思ふ事は出来ない。自我は之に對して受身になるのである。然るに赤、

いものに於いてはそれが昨日も今日もあると考へる。明日あるかどうか解らぬが然し其が明日もあるべき筈のものとして考へる。これが對象性である。故に對象は active であると言はねばならぬ。表にすれば

	内容	對象
主觀	(一) passive	active
(二) 現在		非現在

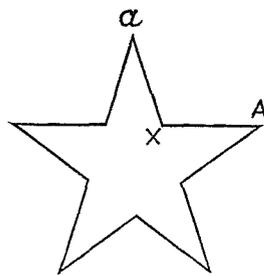
意識内容と言ふ時に内容は意識に現前する、現在そこにある。然し對象になると非現在の要素を含む。

對象が非現在であると言ふ事は、對象が超越性を持つてゐると言ふ事である。即ち對象は主觀を超越し、對象は我と離れて存在すると言ふ事である。物質不滅則やエネルギー恒存の思想は之に基づく。數學の眞理に於いて特に超越性、非現在性を見る事が出来る。ロティットの如き場合を考ふるにこれは自我と獨自に存して居る事を見る。此の非現在性を含めば含む程、超越性が大となる。數學の眞理は時間空間を超越し對象が全く非現在のものであると言ふ事が出来る。若し全く非現在のもののであるならば、識らない物、考へられない物は有るとも無いとも言はれない。然し

非現在は全然非現在であるのではなく、其の中に現在もある。非現在で盡されてゐるので無く現在とも結び付いて居る現在意識が無くてはならぬ。對象は自我に對して超越性を持つものではあるが、其の中にも現在意識があつて、その現在意識と結合して知られると言ふ單なる結び付きではなく現在意識が非現在を代表する關係にある。對象と自我、非現在と現在とは斯る代表者の關係があり對象に對して主觀は發動的に現はれる。現在を以つて非現在を現はさんとするには積極的働きが無ければならない。之が努力である。物質不滅則の如く僅かの現在を以つて大なる非現在を表はすには大なる努力が要する。ナトルプは之を、 $A \mid X$ の形を以つて表はしてゐる。 $A$ は現在意識、 $X$ は非現在である。 $A \mid X \parallel$ 對象である。之れは $A$ 現在意識が $X$ 非現在を代表し、而して $A \mid X$ が一つとなつて始めて對象となると言ふ事を現はすものである。 $X$ を重く見る立場は、内容と對象とを峻別する事になる。リツプス、フツサールは $A \mid X$ の記號を用ひないが $X$ を重く見る立場である。ナトルプは $A \mid X$ を記號を用ひてリツプス、フツサールを批評して自からを發展せしめてゐる。ナトルプは二つの點から之を批評してゐる。

(一) 内容  $A$  と、 $A \mid X$ 、即ち對象との關係は移動的である。流動的である。内容と對

象との區別は絶えず變つて進む。赤と言ふ内容を意識してゐる場合、其の内容は直ちに對象ともなる。現に持つてゐるものが果して赤だらうかと問ひ其は赤に違ひ無いとなると赤 (red) が赤そのもの (redness) となる。さうすると何人が見ても赤と見なければならぬと言ふ普遍妥當性を得るに至る。赤に對し赤を自我の外にある様に見て疑問を懷き判斷する時は我に對し獨立して存在すると言ふ意味を持つてゐる。現に與へられた内容は、之に判斷的態度を以つて臨む時は、内容は對象となる。



之を了解し易くする爲めには、幾何學的圖形を以つてするがよい。a を注意點とし X を注意に上らざる點とする。今内容に注意すれば a が注意に上り他は非現在となる。邊に沿ふて注意點を移して行けば先の注意點も非現在となる。斯く注意點を次第に移して行けば全體は紅葉の葉の様な形をしてゐると解る。此處に A—X の關係がある。即ち a が現在である時他は X、a が移れば先の a は X となる。斯く絶えず移動して全體が解る。

内容と對象との區別は第一には斯くの如く流動である。Flussigkeit である。

(二) 第二の論點は内容も對象も共に意識されてゐる意識内容であると言ふ事であ

る。A—Xに就いて、Aは現在するもの、代表者(Das Repräsentierende)再現者であり、Xは非現在被代表者(Das Repräsentierte)であるが、此の各々に付いて意識されたものでなくしてはならぬ。代表或は再現作用はAに即して意識されて居るものである。さうで無ければ意識には上らない。Aに即して何かの形で意識されてゐるものがXを代表すると言ひ得る。Xから言へば、Aを超越してゐるのである。A—Xの關係は代表作用であり、超越作用である。超越作用は何等かの意味でAに即して意識してゐるのである。現實に無いXも必ず何かの形で意識されて居るのである。然らざれば意識と言ふことは成立しない。A—Xの場合、A、Xをば關係項と言ふ。關係項は最小限度二項である。Aが解りXが解らないと言ふ事も何かの形で、XはAの關係項として現在してゐるものである。換言すれば、XはAに對する關係項として意識されねばならぬ。

次にナトルプ自身の説に入らねばならぬが、彼はA—Xの形にて自説を發展せしめてゐる。Aは問題では無いが、對象はA—Xであるとする所に問題がある。AがXを代表すると言ふ場合、非現在のもものが現在であると言ふ特殊の關係が成立つ事になる。非現在が現在でなければならぬと言ふ事は不思議ではない。之を統一す

る意志がある。意識する時、A—Xの關係は現在が非現在を表はすと言ふ性質を持つてゐる。此の特殊の關係を表はす所の意識がある。如何なる事に於いても意識されたと言ふ時は、其處に此の關係がある。斯る見解はナトルプの卓見である。

ナトルプは時間意識を擧げて説いてゐる。時間意識に於いて、現在の時間、嚴密に現在と言ふ時間は直線上の一點である。ナトルプは之を *Zeitpunkt* と稱してゐる。其は長さの無い時間である。其は無である。其が眞の現在である。さうすると現在は無であるから現在には現在とも言へない。現在は未だあらざるものになる。然しながら此の現在は過去及び未來を代表するものである。非現在から現在に、現在から非現在に向ふ所に、即ち之等が同時に成立する所に現在意識が成り立つ。此の現在が過去と未來とを代表すると言ふ特殊なる關係に於いて時間意識が成り立つのである。此の時間意識に於いて明らかにA—Xの關係が見られる。此の時間意識に於いて見た事は、之を意識の全體について言ふ事が出来る。

再現意識は意識の根本特性である。而して意識の中で努力、傾動 (*Tendenz*) と言ふものが最も根本的なものであるとナトルプは言つてゐる。又傾動努力が無ければ意識は有り得ないと言つてゐる。

努力とは如何なるものかと言ふに、其は現在丈けのものに満足せず、非現在なるものを現在化しやうとする所に存する。現に持たざるものを、現に持つものにしやうとする所に努力がある。これも A—X の關係である。何事でも非現在に關係する事は、其の根底に努力を含む。時間意識に於いては時間の現在が、過去未來に關係する所に努力と言ふ事が成り立つ。時間に於いても努力と言ふ事が無ければ時間と言ふ事は無くなる。時間は努力の上にあるのである。

物を知るに付いて、或ものを認識し、知覺するには努力を含む。感覺知覺にも其の根底に努力が含んでゐる。現象學派にては Intention (指向、志向) と言ふ言葉を用ひ、認識は對象を指向するものであるとする所に特色がある。認識は現に知らないものを限定する事に依つて成る。對象は内容に對し、内容は對象に對して志向する。此の志向はナトルプは努力を根底とすると言つてゐる。普通努力は倫理的に狭く解釋するが、之を廣く解して考へれば知覺作用も努力がなければ成り立たない。之は亦に違ひはないが、之を何人も赤と認めねばならぬとする所には努力がある。肯定作用には努力がなければならぬ。知識が普遍妥當性を得る爲めには非現在に對する努力が無ければならぬ。認識作用、意識作用には自己超越とか現在超越とか言ふ

事がある。其が感覺知覺、道德、藝術にもある。其等に於いて凡て努力がその根底をなすのである。

A—Xと言ふ努力、又は再現意識はAと言ふ現前意識より根本的である。今迄は、Aがあつて其がXに向つて努力すると言つた。即ち今迄はAより(A—X)に向つたのであつた。所が深く考へると、(A—X)の方が根源的でAの方は後から出て來たのである。之は古來特にデカルト以來意識は關係であると言はれてゐる如く、關係無き所に意識が無い。意識に取つては關係が根源的である。關係の項が意識ではなく項と項との關係が意識である。故に項より項と項との間の關係がより根源的である。

關係を根源的として考へれば、 $A \downarrow (A \mid X)$ は本來A—Xの逆である。A—Xを反省して抽象した時、Aと言ふものが出来る。具體的な一つのを抽象してA丈け切り離して見る。此處に内容が出来る。内容Aは抽象分離の作りに依り人工的に作られたもので、根源はA—Xの相即關係に他ならぬ。其れからAが出て來るのである。リップスはAが先にあるとしたのに對してナトルブは反對に(A—X)が先であるとした。AとA—X即ち現前意識と再現意識或は内容と對象とは相並んで存

するものではない。二つは一つのものゝ構成力素と考へなくてはならぬ。具體的意識の相並ぶ力素として内容と對象とがある。對象としての特色はXの方にあるが本來A—Xが一體である。A—Xは力素として並び存在し、對象意識が成立するのである。AとXとナトルプは區別は認めるが其は抽象した區別として見るのである。リップスは其を獨立の存在と見て居る。ベルグソンなら此の關係を滲透(penetration)と言ふ。

自我は内容に對して受身である。對象に對しては發動的である。現前意識に於いて自我は自動的と言ふは比較的の言葉である。全然自動的なるものは存在しない。純粹自動は死である。意識が生きて居るには純粹自動性は無いが發動性がある。意識は關係であり、努力であり再現意識である。意識は作用(Akt)であると言ふ事は、意識は現在意識であると言ふのと同じである。ブレンタノーは「意識の根本特性は對象の指向的内在(intentionale Inexistenz des Gegenstandes)」であると言つてゐるが、此の言葉は今迄述べた事と同じで、つまりA—Xの關係を述べたものである。

### 三 客觀化(Objektivierung)

客觀化は主觀を明らかにするに必要である。又客觀化は知識の特性を表はすも

のである。狭義の認識作用即ち物を知るとは客観化すると言ふ事である。

(1) Objektivierung des Subjektiven. 主観的者の客観化。

物を知ると言ふ事は、主観的者の客観化にある。知ると言ふ事は何物かを知るのである。Erkennen ist das Erkennen für Etwas. である。此の Etwas は必ず知る我に對して gegenüber である。故に知る或るものには我の外にある (draussen) ものである。此の外にあるものを知るのであるから、物を知ると言ふ事は客観化する事になる。然し此の外在關係は決して絶對的外在であり得ない。何等かに依つて外在と言ふ事が意識されなければならぬ。それで物を識ると言ふ事は再現意識 A—X の形であらはれる。X が外在するものであり、A は主観、X は客観である。A は現に意識されてゐるもの、其の限り主観的である。主観的が主観として止まる限りは認識したとは言へ無い。A が A に止まらず己自からを超えて über sich に、X を自分と關係せしめると言ふ事が、或る物を識ると言ふ事である。既に知られたものに依り、知られざる X を知る事が認識の根本義である。A は限定されたもの、X は限定せらるべきものにして、限定せられたものを以つて限定せらるべきものを限定するのが認識である。赤なら赤の感覺は純主観である。此は赤であると判断するは、赤 *rot* を以

つて赤そのもの *das Rote* を限定する事である。赤そのものは然らば如何にして生じたか。赤そのものが A の位置を取るには刺戟に依つて生じたのである。即ち赤そのものから刺戟 X を限定したのである。然らば次に刺戟は如何にして生じたか。刺戟が A の位置を取る爲めには電波に依るのである。即ち刺戟 A が電波 X を限定したのである。斯く認識は左の如く進むものである。

(A) (X)

赤 ↓ 赤其者

赤其者 ↓ 刺戟

刺戟 ↓ 電波

現在の文明では電波波長〇・七ミクロンの所迄解り其以上は解らない。斯く凡て知ると言ふ事は主観性から見れば A を超えて A に依つて X を限定して行く事、換言すれば主観的なものを客観化する事 (*Objektivierung des Subjektiven*) である。之を反省すれば如何なる客観的認識も、其に對して主観的なもの A が無ければならない。即ち *Subjekt* が前提されて居なければならぬ。然して其を出発點として X に及ぶのである。其の X たるや A に對しては外在又は超越の意味を持つ。その X は主観

的なるAに結び付かねばならぬ。この兩者の緊張關係により物を知る事が出来る。之を従來の哲學によりて他の方面より説明すれば次の様である。

(二)カントの *Synthesis*. 綜合

主觀的なるものゝ客觀化を別な言ひ方で、カントに結びつけて雜多の綜合とも考へられる。カントは多樣の統一、雜多の綜合が知識であるとした。而して知識は生命あるものと見てゐる。即ち知識は自己を分解したものではない。A||Aは分解判斷である。此のAを  $a_1, a_2, a_3, \dots$  と分ける事も多樣の統一だと考へられる。然し今、赤い物を考へる時、赤、一定の形、物質材料とたゞ羅列したのでは認識とならない。其等の間に *plus* 加へるが無くならぬ。一定の結合の仕方で綜合した時に赤があるのである。客觀的知識が成立するのである。ナトルプは關係させられたもの *Bezogenges* 即ち材料と關係 *Beziehung* 即ち形式とは離れたものでは無いと見る。關係させられたもの即ち與へられたものがAであり、關係がXである。其が勝手に關係させられない。其は實體と屬性との範疇に當る。實體と屬性の關係の働き方を説いたカントの範疇は内在から外在に向ふ自己超越の根本方法である。主觀的なるものを客觀化する事である。

之をアリストテレーズの考へに據つて見るに、潜勢(潜在)するものを現勢(現在)なものに實現するのが知識の發展である。規定されないものを限定する事が知識の發展と見てゐる。

### (三) 客觀化の方向

客觀化に於いて法則認識 (Gesetzeskenntnis) と言ふ事が目標となる。客觀的知識は法則認識である。客觀化は無限の階段で成立するものであるが、其の客觀化を、最も純粹なる形で向ふ目標より見れば法則認識である。認識とは Erkenntnis von Etwas. である。又 Erkenntnis des Gegenstandes. である。對象の認識に就いては今日知識論上問題のある所であるが、其は科學 Wissenschaft である。對象の認識が出來上れば其は學問である。如何なる學問も法則認識を目的としてゐる。ナトルプは法則への還元はあらゆる種類の客觀化、即ち認識の共通特性であると言つてゐる。之に對して二つの有力なる反對が起る。其の一つは、凡ての認識は法則認識であると言ふに對して事實認識 (Tatsachenkenntnis) は法則認識と違ふと言ふのである。事實認識は記述 (Beschreibung) であり、説明 (Erklärung) である。マッハやアペナリウスの如き人は物理學も事實認識であつて記述的學であると言つてゐる。(田邊氏科學概論參照)

ナトルプは之に三つの場合があると言つてゐる。

1、事實認識も法則認識も共に客觀化に屬する。

2、此の二つのものは互に含み含まれてゐる。

3、事實認識は法則認識に依存する。

事實を認識する時には何時何處であつたかを知らねばならぬ。即ち時間空間を必要とする。然るに時間空間の限定は法則認識の著しき例である。要するにナトルプは法則認識と對立するものとしての事實認識を認めないのである。

他の一つは西南獨逸派の有力なる反對である。即ち西南獨逸派に於いては自然科学に對して文化科學(或は歴史科學)が存し、自然科学は普遍的な現象を取扱ひ、其の方法は法則定律的 (nomothetisch) であるが文化科學は特殊な事實を取扱ひ、其の方法は個性描寫的 (idiographisch) であつて具體的・個性的なるものゝ記述描寫を目的とすると言つてゐる。

之に對してナトルプは文化科學即ち歴史科學も法則認識であると主張する。歴史も法則認識に據らなくてはならぬ。法則と言ふは、抑も多様の統一に他ならぬ。例へば重力の法則は無數の多様の統一である。地球であつても凡て物質を有する

ものは之に従はなくてはならぬ。法則と言ふものは出来るだけ多數を統一すると言ふ事にある。即ち法則とは  $A - X$  であると言ひ得る。其を徹底さして行くと言ふ事となる故、法則とは努力であると言はねばならぬ。即ち再現意識が法則である。

#### (四) 客観化の手段

(a) 一般的手段としては固定作用 (Feststellung) である。流動する意識にステーションを作り流動を留めて見るのである。物を知ると言ふ事は斯く流れを止めて見る事である。故に固定作用は抽象作用である。客観化は常に抽象作用を行ふのである。此のステーションを集めて繋ぎ合せる抽象作用によつて Das Allgemeine (一般的东西) が知られるのである。間を抜きにしてステーションのみを見るのであるから其は抽象作用であり分析作用である。之が客観化の一般的手段である。

(b) 特殊な手段として同一化 (Identification) と差別化 (Distinction) との二つの最も初歩的な客観化の手段がある。感覺赤を Das Rote と知れば其れは同一化が行はれたものであるが、其と同時に其は差別化が行はれたのである。此の二つは其故に離れたものでなく、同一化の根底には差別がなければならず又、差別化の根底には同一性がなければならぬ。此が客観化の第一歩であるが、次に Order of Series. と云ふ事と

Zählung」と言ふ事がなければならぬ。Order of Seriesと言ふのは例へば赤色の例を取ると其を七色の系列に入れて其の順を定めるが如き事を言ふのである。Zählungと言ふのは例へば音を聞いてたゞ聞くのでなく何調かを考へるが如く其の數を數へる事である。此等の二つも同時に働くのである。客觀化の手段の第三はRelationである。此の關係に三つある。

(イ) 例へば我と音との關係。

(ロ) 時間と空間との關係。

(ハ) 原因と結果との關係。

客觀化の手段の中に斯る系列があるのである。

(五) 客觀化の階段と種類。

此の階段は原理上無限である。主觀的なるものゝ客觀化には其の果てが無い。然し事實としては或處迄より進んで居らぬ。然し又學問には永遠の進歩がある。今日迄の處では例へば赤の感覺↓刺戟↓赤そのもの↓電波↓〇七ミクロンと進んで來て居るが、進めば進む程主觀的特質を失つて行く。其が進んで電波と説くに至れば非常に客觀性を得て來る。然し盲目者にはさう見えるか、動物にもさうあるべ



を取扱ふ。前者は論理學に向ひ、後者は倫理學、美學に向ふ。前者は時間的に規定された實在なるに對し、後者は時間にも關係するが時間を超越する。當爲には超時間性があり、其は無限の世界に入るものであると述べてゐる。前者は相對、有限に止まるが、後者例へば道德意識は努力に於いて無限の世界に入ると言つてゐる。

次にナトルプは精神現象と物理現象との區別について鋭い觀察をしてゐる。ナトルプは心的と物理的との區別に多くの頁を取つてゐる。其の要點は物と心とは同じものゝ見方の相違に過ぎない。同じく主觀化或は客觀化なのである。一元論である。そして精神現象にも空間があるとす。

#### 四 客觀化と主觀化との相對性 (Korrelativität des Objektivierung und der Subjektivierung)

此の問題はナトルプの最も得意とする所であつて、客觀化と主觀化との深い關係に就いて優れた意見を發表してゐる。西田先生は之を採りて先生の哲學體系中の重要な部分として先生の卓見を以つて發表して居られる様である。

ナトルプは此の兩者の關係を次の三段に分ちて論述してゐる。

(一) 主觀的と客觀的とは相對的である。

## (二) 主觀化と客觀化との相關性。

## (三) 主觀化と客觀化との比較。

(一) 主觀的と客觀的とは相對的のものである。客觀化には無限の階段が有り得る事は既に前章に於いて論じた如く、例へば赤色に就いて考ふるに主觀の客觀化への發展は無限の階段があつた。即ち感覺の赤、赤そのもの、刺戟電波……と此の客觀化の進展は無ある。此限での進展は電波を以つて止つたのでは無い。今後の研究により如何に發展するか今豫測する事は出来ない。然し之れはPhysicalの客觀化の發展である。das Roteからは又別な方面への客觀化の發展も無限の階段になる。十九世紀後半より二十世紀へかけてのマイノング、エーレンフェルス等の主唱にかゝる Gegenstandstheorieとはやはり之の考へ方を進めたものである。

物は Dasein に對し Sosein と云ふ事が出来る。Soseinとは存在ではないが存在と同姓にして存在の意味として考へられ意味の世界を構成するものである。斯くて Sosein も對象となり得るのである。色なら色其自體の世界は Dasein の世界であるが別に存在の意味として Sosein の世界が構成される。色を Sosein の世界より見て之に幾何學的考察を加へて此處に Farben Geometrie の説を成立させたのがマイノン

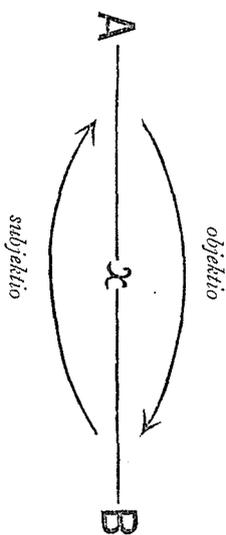
グである。Farben Geometric の説は色の七色系統を見て各色の關係を幾何學的關係にて説明したものである。斯くの如く意味として對象を考へて行くのであるから對象の世界では圓い四角も考へ得るのである。斯く意味は存在と異なる所なく對象的に存在するものであるとするのである。斯る考へ方をする學者は獨逸にも英國にもある。英國のラッセルの哲學はマイノングの對象論に等しいものである。

次に Exist と Substist との世界の別を考へねばならない。此は Dasein と Sosein との區別と同じく Psychological と Physical との見方の別より來る。對象の世界は時間空間を超越した Substist の世界である。即ち目的の世界である。前に色の例で刺戟から物理的世界への進展を考へたが此の一事でも種々の對象の世界を考へ得られる。先に述べた赤色の例は物理的認識の客觀的世界を赤の感覺から考へたものである。然し之を以つて凡てを盡した最高のものとは言へない。之はマイノングの始めた所ではなくギリシヤの昔からあつた所を述べたに過ぎない。凡ての世界が赤一つより回轉して來るのである。物理的に一つの赤に就いて考へても無限の階段が生ずるのである。より客觀的なものが無限に續く可能性を持つてゐるのである。ブランドクの所謂「人間から解放した客觀世界の無限」が考へ得られるのである。現在を

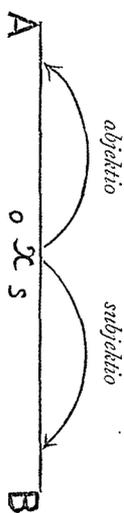
以つて此の世界が盡くされたと考へる事は出來ない。無限に進む可能性を有し又此の所に人間の無限性があるのではあるまいか。文化の發展が將來無限なりと考へらるゝも此の根據より説き得るのである。次の世界が更によき世界である事は大切な事である。

所が主觀的と客觀的との區別は此の客觀化の高下の別にある。刺戟の赤を取つて見ると其は赤色に對して客觀的である。然し赤の刺戟は電波に對しては主觀的である。斯く客觀化に於いて客觀的とはこれから到達せらるべきより高き階段を其れより、より低き階段に比べて客觀的と名づけるのである。主觀的の方は其の反對で、より高き階段に比べて、より低き階段を名づけて言ふのである。色に於いて言ふならば、*das Rote* に對して感覺の赤は主觀的であり、更に赤に對する感覺の素質傾向はなほ主觀的であると言ふ事が出来る。然して絶對的主觀と言ふものはない。主觀的客觀的とは比較的、相對的の事である。されば一つのものに就いて主觀的とも客觀的とも言ふ事が出来る。色の感覺に於ける電波は今日、最高の客觀化であるが今後より高き客觀化が將來するかも知れない。此處に科學發展の無限がある。主觀と客觀とは同時に成り立つものであり従つて主觀化への方向には餘り進め

ない様に見えるが然し此の主観化への方角もやはり原理として無限の階段があると考へる事が出来る。ナトルプは此の關係を次の如く方向の相違として説明してゐる。



私は之を前圖よりも次の如く説明した方が解り易くてよいと思ふ。



XはAに對しては客觀的、Bに對しては主觀的である。

(二) 主観化と客観化との相對性。

客観化 (Objektivierung) とは主觀的なるものへ客観化 (Objektivierung des Subjektiven) である。客観化は分析、抽象、固定の作用をなすものであつて其の客観化の特性よりす

れば主觀的のものを凡て客觀化するのではなく主觀的のものから無用の或る部分を切取つて認識の對象となすのである。主觀より無用の或るものを引出して客觀となす如く次第に不必要なるものを切取り客觀化への限定を進めれば最高客觀化に到達する事が出来る。



斯く或る物を抽象して客觀化を發展して行けば客觀化の學問は進歩する。此の場合對象に不必要な主觀的なのは之を捨てて行く。今客觀化の認識より言ふと、水を分析して不純物は次第に捨て、終ひに残る所はH<sub>2</sub>Oであるとする。水がH<sub>2</sub>Oとなるまで無用な主觀的なのは捨てられ、捨てられた主觀的なのは客觀化の方から見れば無用であるが捨てられたものは其が無くなるのではない。只だ一定の方向に直接關係がないから捨てた迄である。所が若し此處に此の棄てられたものに興味を持つならどうしたものか。棄てられたものも棄てたものでない。此の棄てられたものは一方向の爲めに残されたもので他の方から考へたらより重要で

あるかも知れない。残されたものも一と先づ客観化の立場に立ち客観より主観に逆に歸り、自分と残されたものと合すれば元の客観的なものになる。復歸して來たものは元と全然同一であると言ふ事は出來ない。然し残された主観と合して何かの關係を以つて再構成をなすのである。客観化されたものより元の與へられたものもの即ち所與或は體驗に歸つて見ると、其處に捨象された主観の意味もよく解つて來る。一度客観化したものが元へ歸る事は元出て來たのであるから可能でなくてならぬ。又其は必ず要求せらるゝものである。知識は全體を求むるが故に残されたものをも顧みる事が必ず必要である。主観から抽象限定して客観になつた場合、客観は明らかになつたがこれでは主観は明らかにならない。たゞ纏つて顧みる事に依つて始めて明らかになる。故に此處に全體を知らんとする要求が現はれて主観へ歸つて行く (Rückgang) と言ふ事が大切であり、それが必然であり又可能である。而して此の歸ると言ふ事は何れの階段に於いても可能である。即ち主観的なものへ歸る事は凡ての階段を通じて可能である。主観への即ち體驗への回歸は全客観化の階段に對して可能である。

之がナトルプの心理學の根本法となるのである。此の復歸する事 (Rückgang) は

之を主觀化 (Subjektivierung) と名づける。此の主觀化と言ふ事は必然に要求される課題 (Aufgabe) である。凡て學問は客觀化を求め、法前を求める。其の爲めに分析抽象を行ひ主觀的なるものを捨象して行くのである。斯く客觀化が進めば進む程學問は高い階段に進むのである。感覺の赤より電波に至れば學問的に高くなつたと言ふ。然し電波より感覺の赤が低いとは何によつて言ひ得るか。この客觀的になると言ふ事が知識の唯一の標準になると言へば其でよいが然し客觀化する事のみが知識の唯一全體の方法だと言ふ事は出来ない。此に對して具體的なるものを擱むのが認識の目的であるとするれば、逆に却つて赤の感覺の體驗が最も高い階段になる。然して電波が最も低い階段となると考へられる。何んとなれば電波は見られない。赤は見られる。故に赤こそ高く電波は却つて低いと言はねばならぬ。客觀化は分析抽象、固定の作用であるに對し主觀化は具體的なる流れで一切を含むものである。主觀に回歸した具體的なるものは流動的なるものである。其の具體的なるものを多く求める時、客觀化は此に遠ざかり主觀化が高い階段に進むのみならず客觀化は主觀化に對し方便 (Mittel) となる。即ち客觀化して見ると言ふ事は手段にして目的は寧ろ主觀に回歸する方にあるとも考へられる。

## (三) 主観化と客観化との比較。

一般的に此の比較より生ずる所は眞に實在するものは一つの意識 (Bewusstsein) であり一つの生命 (Leben) であると言ふ事になる。又カント派の意味で言へば經驗と言ふ事が之を表はして居る。その生命自體の働きは相反する二つの方面から見られる。主観化と客観化とは其れ自ら獨立して存在するものではない。又相並んで存在するものでもない。實は一つのものであつて唯だ正反對の二方向から見た見方の違ひであり之を *neben-einander* と解してはならぬ。之は *Rekonstruktion* の所で詳しく話しするが B から A に至る主観化は客観化を前提としてゐる。又主観化は客観化を前提する。客観化が無くて主観化は無い。又客観化も獨立に存するものではない。客観化も主観化を前提せず豫想せずには存しない。客観化は主観的なものゝ客観化である。問題根據 (*Problemggrund*) を前提としてなければ如何なる客観化も行はれない。兩者の密接なる關係は以上の如くであるが只だ其の相違點は次の如くである。

客観化は外向 (*Ausschichtung*) であり、

主観化は内向 (*Innenrichtung*) である。

圓を例として考へれば外向は中心から圓周に向つて無限に發展する周邊への擴張であり、内向は圓の中心に向つての深化 (Vertiefung) である。外向は領土擴張の様なもので侵略的に自分の所有權を擴張しやうとする。電波は赤よりも所有權が廣い。電波は目なき者にも存在する。内向は既に占領した領地を我物として内より支配せんとするの態度、即ち同化的態度である。外向を大戰前のカイゼルに譬へれば内向は老婆的態度である。又外向は旅行に出かけて見聞を廣め内向は故郷に歸つて其を有效にする様なものである。内向は言はゞ心のふるさに歸る様なものである。ナトルプは好んで之をプラス、マイナスで比較してゐる。客觀化はプラスの方向であり、主觀化はマイナスの方向である。俗に山を客觀化の方向とすれば谷は主觀化の方向であると比較する事が出来る。プラスとマイナスとは方向の差異である。と見る場合、注意すべきはマイナスの方向である。マイナスと言へば減る方のみを考へるが此のマイナスは減る方のみではない。主觀化は根源に歸る事であるが客觀化の限定を捨て、一つ一つ減つて行つて根源に歸ると考へるのは謬見でマイナスの方がプラスより却つてより以上豊富である。主觀化する事は客觀化以上に豊富さを増すのである。それでプラス、マイナスの字義通りに増減と考へてはなら

ない。唯だ正反の方向を示したのである。主観化は客観化に進む時の無数の規定を棄て去るのではなく、棄てられたものを加へて行くのである。而して主観化は主観化の最高階段に於いて最も豊富となる。それで主観化は原體驗の無差別平等に歸る事では無く内面的に規定する事である。それで主観化の極限から言へば其は最も豊富な具體的なものを持つてゐると言はねばならぬ。斯く主観化と客観化とは方向の差異に過ぎないものとなる。

次に主観化客観化の原體驗又は問題根據(Problemgrund)に對する關係はどうかである。即ち純粹主観に對する主観化客観化の比較は如何なるものか、次の問題である。如何なる主観化客観化も純粹自我即ち原體驗を前提としてゐる。此の原體驗は最も生々したものである。客観化は原體驗に對し屍體解剖をなす解剖的態度である。主観化は一度殺した生命を元の生命に還して見る態度である。客観化は生命を殺して見る態度で即ち原體驗から遠ざかる事で主観化は原體驗に回歸して來る事である。客観化は抽象化(Abstraktion)であり分析を行ひ固定して行く事である。主観化は之に反し具象化(Konkretion)であり綜合を行ひ流動に入る事である。次に主観化と客観化とを比較するに形式と質料との關係より之を見れば一層明

らかになる。形式と質料との關係は一と多との關係である。形式は統一を意味し質料は多を意味する。原體驗は形式質料未分のものであるが客觀化は法則認識であつて形式に向ふ統一である。法則認識は統一の方から見て行くのである。例へば重力の法則の用ひらるゝ範圍は人のみならず鳥獸は勿論木石天體に至るまで此の物理相法則の支配を免れる事は出来ぬ。又數學の  $\frac{1}{2} + \frac{1}{2} = 1$  の法則に於て之を A | X の關係として見ればこれ位微妙なものはない。之に如何なる物を入るゝも任意である。我々が望んでも望まなくてもそれは法則であつて動かない。然し其に入るものゝ依つて意味が違つて来る。然して其は生活上缺くべからざるものになる。客觀化の方で質料の雜多は重きをなさないとして之を背後に斥ける。Mittelとしては質料を認めるが其自體としては認めない。gewaltige Einseitigkeit をなすのである。主觀化はその形式を客觀化から與へられて持つてゐる。其の上に客觀化に於て棄てられた質料を形式と同様の地位を與へて生かさうとしてゐるのである。ナトルプは Phantasie を例に取つて説明してゐる。之は嚴密なる學問では排斥せられる。然し空想も學問と同等の資格を以つて生かさねなければならぬ。個性を生かすと言ふ事はナトルプより言ふと多なるものと特殊なるものと同等に生かす事

を意味する。それで個性を生かすと言ふ事は主観化から出て來なければ満足に説明する事は出來ない。客観化の方面にては當爲に付きては生かす事もあるが大體に於ては殺して行くのである。主観化は同等の立場にて個性を生かす事が出来る。主観化の最高階段は原體驗其儘とは言ふ事は出來ぬ。客観化の方面にて無理に統一したものと其と棄てられたものとを加へて生かして原體驗に回歸するのである。原體驗に對しより近く近づくのである。

主観化と客観化と原體驗の關係を次に潛勢(Potenz)と現勢(Aktualität)との關係より見て行かう。潛勢及び現勢なる語はアリストテレスの用語より來たものである。元の體驗は reine Potenz であつて其は凡ての客観化の前の主観的なるものである。reine Potenz 其れ自身としては我々は之を知る事は出來ない。之を内容化する事、對象化する事は出來るが認識する事、體驗する事は出來ない。何んとも言ひ得ないが無ではない。感知されたとも、體驗されたとも言へない。凡ての客観化の前提であり、あらゆる主観性の據つて立つ根據である。その根本概念(Grundbegriff)であると言ひ得る。其を嚴密なる言にて言へば、reine Potenz は單に negativ なものでなくして限定の可能性及び課題の積極性を意味する (Positivität der Möglichkeit und der Aufgabe

der Bestimmung)。reine Potenz は其れ自身何等の規定がない。然し其は限定する事が可能であるのみならず其の要求される課題である。即ち其は限定の可能及び要求の積極性を持つ。reine Potenz は限定される事に依つて Aktualität になる。さうすると我々の知識は全體から考へると三段の區別が生ずる。

1. reine Potenz.

2. Objektivierung des Subjektiven.

3. Subjektivierung des Objektiven.

第一が Potenz なるに對し第二は Aktualisierung である。又第三の主觀化も一つの Aktualisierung である。それは主觀的實現化であり即ち其は自己活動であると言ふ事が出来る。知識は此の第三段に至りて完全實現化に達する。

### 五 再構成の方法

再構成の方法 (Die Methode der Rekonstruktion) は心理學特有の方法である。心理學は主觀性を明らかにする事であるとは之れナトルプの提案である。凡ての客觀化の學問は構成法 (Konstruktion) を採る。即ち概念を造つて之に依つて無規定なるものに規定を與へる。無限定なるものに限定を與へる。自然科學の方法は之で盡き

てゐる。 Bestimmtheit des Was. である。此のチヨークならば白として規定するとか何とか規定するのである。構成法は直接所與を限定して此處に對象の世界を造り出すのである。故に構成法は創造の世界である。其れで主觀化は善く言へば創造であり悪く言へば抽象に依つて創造する抽象の世界である。主觀性を明らかにする心理學は Rekonstruktion である。一言にして言ふと「心理學の方法は科學の創造したもつから最も本源的なる所與をば思想上再生産する事である」と言ふ事が出来る。(das ursprünglichst Gegebene aus den Schöpfungen der Wissenschaft gedanklich wiederzuerzeugen. S. 195)

「然らば科學以外の創造を無視するかと言ふにさうでは無い。科學を以つて學問を代表させてゐるのである。 Wissenschaft の代りに Objektivierung とするとよい。其の方が嚴密である。其は學問のみに限らないからである。即ち客觀化の創造したものと云ふ方が妥當である。然し科學と言つて代表的科學を以つて代表して言ひ表はしてゐると考へればそれでよい。主觀化に於いては誤謬と言ふ事も重要である。眞理と對等の地位の重要性を持つてゐる。客觀化に於いては此の誤謬は捨てられたものである。善を明らかにするには善を明らかにすると共に惡と言ふ事も

重大である。悪を明らかにする事により善は益々明らかになる。眞理は誤謬ありて光り輝くのである。再構成が必要であると言つたが再構成の必要なる所以は具體的なるもの、生命それ自體、主觀を知らうとする止み難き要求を持つてゐる。所が客觀化に依つては生命は分析抽象せられ連續的のものが切々にきりぎれされる。其を再び元の具體的なるもの連續的なものに歸さうとする要求を持つてゐる。此の要求に基づいて再構成が生じて来る。其の再構成可能の條件が三つある。

一、客觀化と主觀化との間には嚴密なる照應關係(Korrespondenz)がある。一々の階段如何なるものに就いても主客兩方向から見得る。此の關係を圖に現はせば次の様である。



二、客觀化は第一次的で主觀化は第二次的である。此の順序を顛倒してはならぬ。生命又は體我(純粹主觀)は之を直接に見る手段方法を知らぬ。我を見る爲めに我を離して見ねばならぬ。生命を見る爲めには生命を殺して見なければならぬ。我を

鏡に寫してそれで間接に我が解るのである。此れは目的から言へば第二次的になる。主観化が目的であるが第一次的に客観化を行ひさうして其を手段とする事によつて主観化が行はれる。

三兩者は外延上全く相合ふ(相等しい)。而して方向のみ正反對である。

## 六 理想的限界論

理想的限界論(Die idealen Grenzen)を三段に分けて話し度いと思ふのであるが、此は全卷のあちらこちらに散在し且つ又前後相矛盾してゐるものを集めて自分で組織立てやうとしたものに過ぎない。

1. Das Ideal der Objektivierung.

客観化の理想は Die letzte Einheitsbezug (最後の統一)であつた。此の客観化に因つて無数の法則が構成されるが其の法則が相互無關係であつては原理にならぬので無数の法則がみな相互嚴密なる相關關係(strenge Wechselzuehigkeit)に立たねばならぬ。例へば實在の法則と當爲の法則、目的論と因果決定論等の法則が無關係でなく嚴密なる相關關係に立つてゐる。

客観化の關係を先に  $A - X$  の形で言ひ表はした。其は多様の統一である。又其

は法則認識であると先に述べた。客觀化は凡て法則を目的とする。此の最後の統一の状態に於いては凡ての法則的關係が包括されてゐる。所が今迄に知られてゐる法則は極く僅かなものに過ぎない。其處で理想としての最後の統一は内容的に如何なるものかは吾々に知りやうは無い。然し何等かの方法で最後の統一状態が知る事が出来ぬだらうかとの考へが起る。所が其は方法の統一(Einheit der Methode)に依つて最後の統一を知る事が出来る。一言にして言ふと客觀化は直線の様なものだが其の中に方向を異にする若干の方向線がある。吾人は此の方向線に向つて客觀化して行きそれで種々の客觀化の世界が出て來る。その方向線は幾らでもあるのでなくして大別すれば二か三に歸する。存在(Sein)の方へ向ふのと當爲(Sollen)の方へ向ふのと創作(Schaffen)の方へ向ふのと三つになる。其の各々のものは夫々一定の方法を用ひて客觀化をなす。其の方向は定つてゐる。其の方法によつて取り扱はれる材料は無限にあるから客觀化は無限に續く。然し其の各々に就いては方法そのものは定つてゐる。嚴密に言へば方法其のものも新たな多様が出る時變つて行くものである。これは他のものに變つて行くのではない。内に於いて精密になる事である。方法も生命的で生命の働きにも道筋が定つてゐる。三つのもの

は方法の點に於いて相異りながらも相連なつてゐる。然し最後の統一の内容は解らない。唯だ方向丈けが解つてゐる。

此の客觀化即ち法則認識によりて對象を知るのである。法則認識によりて對象を認識するのであるが此の對象を認識すると言ふ事は對象統一を構成する事である。更に考へるに法則によつて對象統一を構成する事は如何にして可能なるか。此處に主觀の問題が起る。對象の統一は意識の統一に基づく。カントに依れば意識の統一に依つて對象の統一従つて法則の認識も行はれる。客觀化の理想なる最後の統一なるものは意識の最高統一に基づくと言はねばならない。カントの先驗我又は意識一般とはこれである。之を自我の統一と言つてもよい。之をナトルプの考へに直すと如何になるか。最高の客觀的統一に對しても其れに主觀が相應する所の主觀化が行はれなければならない。如何なる主觀的關係にも客觀的關係が對應すると言ふ根本原理に従つて客觀化の理想なる最後の統一には主觀化の最高統一が其に對應しなければならぬ。

### 1) Grenzen der Subjektivierung

主觀化には限界がある。 untere Grenze 及び obere Grenze の二つを立てゝゐる。之の

ナトルプに於ける「主觀性」の問題に就て

二つを理想的限界範疇 (ideale Grenzkategorie) と云ふ。

下の限界 (untere Grenze)

下の限界とは純粹潛勢 (reine Potenz) である。即ち原體驗である。其れ自身には絶對無規定である。而も其は凡ての規定を取り得るもの又あらゆる方面に限定し得るもの又限定せらるべきものである。限定の可能及び課題と言ひ得る。即ち限定が可能であるのみならず其が要求せらるゝ課題である。例へて言ふと存在する所の無 (Seiendes Nichts) である。其れから凡ての Sein が生れて來る。或は又例へば暗黒なる地下 (der dunkle Untergrund) から凡ての明るい意識生活が生れて來るのである。其は凡ての區別及び差別の消極的根底にて而も凡ての差別は其から生れると言ふ事である。要するに原體驗又は純粹自我は己自から空しくして、而も一切を生むべき母體になるのである。其から生れて來るものは大別すると二つになる。生れて來るものを Inhalt と言へば其は二つの種類になる。

1. 客觀への規定 Bestimmung zum Objekt

2. 主觀への規定 Bestimmung zum Subjekt od. Ichts

reine Potenz は Nichts とある。其に對して reine Ich は無であるが其を Ichts としたの

である。seiendes Nichts の N を取れば Ichts となる。それで reine Potenz を否定すれば内容になる。Nichts の否定は Ichts と言ふ内容になる。Nichts と言つても全然の無ではない。之は言葉では矛盾してゐるが實質上矛盾してゐない。

### 上の限界 Obere Grenze

上の限界は凡ての規定が皆實現された状態、其の中には何等の Potenz も含まない完全なる現實態(現勢態)であると定義してゐる。凡ての客觀的规定も皆含んで居る。更に其れに加ふるに客觀化によつて殘された所のものをも亦凡て規定した状態である。此處にも前に言つた嚴密な相互關係性が成り立つてゐる。其れをカントの哲學に結びつけると上限界は先驗我或は先驗意識に相當するので一切之に包まれてゐるのである。ナトルプは其を最後の一切を包む意識(又は自我)と言つてゐる。之の自我に於て最も具體的なるものを知るのである。更に進むと上限界と下限界とは結局一つに相合ふのである。下の原體驗の自我と一切實現されてゐる上限界の自我とは實質的には一つである。異なる所は原體驗の方では凡ての限定さるべきものが未だ限定されないで居る點である。上限界は潛在的に含まれてゐたものが實現したのである。「幼兒の如くならずば天國に入るを得ず」とは幼兒の心を *reine*



### 三、主観化と客観化との合一、

認識の最高理想は主客の合一でなければならぬ。客観化の極限は一切が法則的統一を得ると言ふ事である。之れ最高抽象的である。主観化の方は之に對して上下何れの極限に於いても最も具體的なるものである。主観化と客観化とは反對の兩極に立つてゐる様に見える。そして之は離すべからざる二つである事は屢々言つた如く明らかである。此の二つの極端は恐らく合致するであらうとナトルプは言つてゐる。

今尙ほ之を追求して見るに、客観化と主観化と共にみな完成されたとしたらどうなるだらうか。客観化になる原體驗は何物も餘す所無く客観的に規定され又主観的に規定されてゐる。之は原體驗が現實になつてゐる状態であると見なくてはならぬ。凡てが實現され盡された状態は凡ての分離と共に結合があり、凡ての停止が鎔かされてゐる理想状態である。そこで主客の對立は失せて仕舞ふ。然し全く失せて仕舞ふのでもない。客観化は主観的なるものゝ客観化であつた。又主観化は客観的なるものゝ主観化であつた。同一の内包又は外延に付いて、十一で表はされる見方の相違があるのみで、其の見方の相違を除けば主観化、客観化は同一である。

十の一二三……の極と一の一二三……の極とは極限上では同一であらう。無限に離れた點は極限に於て一點に歸する。つまり認識の理想から言へば十、一、主觀、客觀は必ず失せ去るべき筈である。絶對的なるものに對して主觀と客觀の對立があるのである。主觀と客觀との理解の仕方は結局其の時々の考察の意金によつて規定されたものである。見方の相違は其れ自體の境には存せず其の時々の考察の意金によつて制約されたものに過ぎない。(二二三頁)有るものは一如の生命の流れである。(宮城定筆記)